

◆本報告書の要約

第1章 週5日制をめぐって

第1節 月2回週5日制への対応

1. 年間総授業時数の変化

年間総授業時数を変えていない学校は4校に3校、減らした学校は5校に1校。都県庁所在地のほうが郡部よりも年間総授業時数を減らしている割合が約10%高い。(図1-1、図1-2)

2. 特別活動への影響

半数以上の学校が学校行事を削減・統合、学期初めや学期末の時間の効率的な使用などで対応する一方、家庭訪問や道徳・学活を削減した学校は1割程度。(図1-3)

3. 時間割上の工夫

3校に2校が土曜日の授業を他の曜日に上乗せ、3校に1校が短縮授業日を削減。年間総授業時数を変えなかった学校のほうが減らした学校よりも20%ほど多く、土曜日の授業を他の曜日に上乗せしている。(図1-5、図1-6)

4. 各教科の授業時数への影響

国語、社会、数学、理科、外国語の5教科や保健体育を削減した学校は各10%未満、音楽、美術は4校に1校強が削減、技術・家庭は6校に1校が削減。年間総授業時数を減らした学校のほうが変えなかった学校よりも、どの教科でも15%ほど授業時数を減らした学校的割合が多い。授業時数を削減した学校のうち8割が、規定時数の弾力性を活かして削減している。(図1-7、図1-8、表1-4)

5. 定期試験への影響

定期試験の回数や日数の削減は全体で2割程度。5回から4回に減らしたケースが目立つ。岩手県、新潟県、熊本県では、半数以上の学校が定期試験の日に授業を実施。(図1-9、表1-5、表1-6)

第2節 学校週5日制が完全実施されたら

教師の3人に2人が、体育祭や文化祭、家庭訪問や個人面談、学活や道徳は「減らせない」と考える一方、教科の授業時数は「減らしてもよい」または「減らすのもいたしかたない」と考えている。(図1-11)

第3節 授業内容や進め方の変化

1. 数年前からの授業内容や進め方の変化の様子

ここ数年で、自作プリントを使った授業や、調べ学習や表現を重視した授業、生徒の発言や発表の時間、机間巡視や生徒に個別に対応する時間が増加。一方で、余談をする時間や、教科書の内容をふくらませた説明、問題集や副教材の使用、練習や演習の時間が減少している。(図1-13、図1-14)

2. 数年前からの授業内容や進め方の変化の感じ方

授業内容の定着度の低下を教師の3人に2人が実感。数学、理科、外国語でその傾向がやや強い。授業内容の密度が薄れているのは社会と理科。教科書が終わらないのは国語と社会。(図1-15、表1-8)

3. 進度が遅れたときの対応

進度の遅れには、授業内容の精選(国語、社会)、練習問題を宿題にまわす(国語、数学、理科、外国語)、他教科の授業時間をもらう(数学)などで対応。社会と理科は次年度にまわすこともある。(図1-16、表1-9)

第2章 学習指導

第1節 宿題の指導

1. 宿題を出す頻度

宿題を出す先生と出さない先生に2極分化している。3割以上の先生が「2、3回に1回以上」宿題を出し、4割弱の先生がほとんど出さない。また、地域ごとにも宿題の頻度が異なり、「2、3回に1回以上」宿題を出す割合をみると、多い県では5割だが、少ない県では2割強にすぎない。学年ごとには宿題の頻度の差は小さい。(表2-1、図2-2)

2. 宿題の量（平均的な生徒にとってどのくらいの時間がかかる量か）

1回に出す宿題の量（時間）は、平均的な生徒が宿題をやり終えるまでに、15分が3割弱、30分が6割弱、合計すると85.4%が30分くらいで終わる量となっている。教科ごとでは、宿題の頻度の多かった外国語と数学でやや時間が短い傾向がある。主たる担当学年別には、あまり差がみられない。（表2-2、表2-3）

3. 宿題は予習的か復習的か

全体では7割の先生が「復習的な内容が多い」としている。また、教科別に差異があり、数学では96.1%と20人のうち19人までが「復習的」と答え、理科でも10人のうち9人までが「復習的」と答えている。これに対して、予習的な内容が多い（「予・復半々」を含む）のは、国語が41.0%、外国語が39.0%、社会が36.5%という順になっている。また、宿題が予習的か復習的かは主として担当している学年ごとにやや異なる。3年生を担当している先生でもっとも復習的な内容が多く8割弱、これに対して1年生担当では7割弱、2年生担当では65.8%となっている。（表2-4）

4. 宿題の内容

宿題の内容を6つに分けて宿題に出す頻度をみると、「よく出す」「たまに出す」を合計してもっとも多いのが、「B. 学校指定の副教材・問題集」の75.9%。2番目に多いのは「C. 自作プリント」で60.3%である。副教材や問題集、自作プリントが宿題の中心になっている。これに対して、「A. 教科書の問題」は48.6%であり、教科書の問題を家庭に持ち込む割合はおよそ5割である。また、「D. 定期試験対策になる内容」は48.2%、「F. 高校入試対策になる内容」は29.5%と試験や入試を意識した宿題は少ない。

担当教科別に、宿題の内容はかなり異なる。国語と社会は、「自作」であるとか「調べ学習」といった言葉がキーワードとなっている。社会ではさらに、「A. 教科書の問題」が少ないので特徴である。数学では、「A. 教科書の問題」が非常に高い値になっている。理科は「A. 教科書の問題」は少なく、「B. 学校指定の副教材・問題集」を使っての宿題が多くなっている。最後に外国語では、宿題の内容が数学ほど復習の要素が多くないので、「A. 教科書の問題」は数学よりも30%少ない。そして「B. 学校指定の副教材・問題集」や「C. 自作プリント」が多い。（図2-3、表2-5）

第2節 家庭学習指導

1. 家庭学習指導の有無と時間

家庭学習指導をする先生は約7割であった。担任学年別には、2年生が7割強、入学初年度の1年生と3年生が8割近くになっている。学習するように指導する時間は、1時間以内が28.6%、これに2時間までを加えた累計は84.8%になる。中学生の家庭学習指導の時間はだいたい2時間までである。担任学年別には、学年が上がるほど長い時間学習するよう指導している。1年生で1時間までが43.5%と4割強いたのが、2年生では30.0%と3割、3年生では19.4%と2割弱まで減っている。（図2-4、図2-5）

2. 家庭学習指導の内容

家庭学習指導では、「A. 教科の基礎・基本に関わる学習」がもっと多く指導されている。「よくしている」「まあしている」を合わせると9割を超える。「B. 定期試験のための学習」も8割強に達している。これらに対して、「C. 高校入試のための学習」は6割、「D. 読書や調べる学習など、新学力観に関わる学習」は5割強である。また、担当教科ごとに家庭学習指導の内容に違いがあった。（図2-6、表2-6）

第3節 新しい学習指導方法

1. 新しい学習指導方法の実施状況

新しい学習指導方法の実施状況をみると、「K. 自作プリントを用いての学習」「I. 個別学習」といった新しい指導方法の中ではどちらかというとすでに新しくはない指導方法に属する学習方法が、比較的多く用いられている。しかし、生徒が自分でテーマを選ぶ「A. テーマ学習」はまだまだ少ない値になっている。さらに、中学の授業が体験学習的に行われることはまだ多くないし、それが学校外で行われるのはもっと少ない。（図2-7）

2. 担当教科・学年と新しい指導方法

担当教科ごとに新しい学習指導方法の実施状況が顕著に異なる。国語はディベートによる学習が群を抜いて他教科よりも多く、社会はテーマ学習、調べ学習など生徒の主体的・創造的な学習や、学校外での学習を取り入れる傾向にある。数学は、新しい指導方法をあまり取り入れていない。ただし、数学の特性を利用して、コンピュータを使った学習と個別学習はもっとも採用割合が高くなっている。理科は、体験学習が多く取り入れられている。外国語は、数学の場合と同じように、新しい指導方法をあまり取り入れていない。ただし、チーム・ティーチングは91.2%と非常に高い割合となっている。また、主たる担当学年ごとに、採用率に差がある指導方法がある。（表2-7、図2-8）

第3章 評価と定期試験

第1節 「学習の記録」

1. 評定の決定基準

多くの中学校の通知票は、評定と観点別学習状況の評価（以下では観点別評価と表記）の二本立てになっている。まず、前者（評定）における評価基準をみてみると、＜定期試験＞を考慮している教師が9割に上る。続いて、＜授業中の態度・勤勉さ＞＜課題を遂行したかどうか＞が考慮されるポイントになっている。教科間で比べると、定期試験は数学においてもっとも重視されている。レポートが考慮されることは理科・社会で多く、授業中の発言回数や発言内容が考慮されることは社会で多い。授業中の態度・勤勉さは、「その他（音楽・美術・保健体育・技術家庭）」で群を抜き、次に国語で考慮されている。素質や全体的印象は「その他」で考慮されやすい。（図3-1、図3-2）

2. 観点別学習状況の評価についての考え方

観点別評価にテストを考慮している教師は53.9%。観点別評価に関しては、従来の評価とは違う独自性と、「生徒の個性を尊重することになる」(64.7%)という可能性が認められている一方で、「主觀に頼らざるを得ない」(81.2%)、「無理がある」(54.7%)、「生徒や保護者が望んでいるとは思わない」(65.9%)といった実践上の問題点が認識されている。そのせいか観点別評価は評定の基本とはなっておらず、評定とは別個の評価として位置づいている。しかし、65.4%の教師が、「観点別評価を意識して記録を取る」などの努力をしている。教科別にみると、観点別評価に対して肯定的な意見を持ち、積極的に取り組む傾向は、国語において高く、テストの結果を目安にする傾向は、数学で高い。社会の教師は、他教科に比べて、観点別評価の実践的問題により直面している。(図3-3、図3-4、図3-5、図3-6)

3. 教師の評価観—客観志向と個性志向

7割の教師が、「直感的であっても、生徒の個性を重視して評価すること」より「客観的な基準を使って、生徒を公平に評価すること」のほうを大切にしている。

第2節 定期試験

定期試験の出題範囲は、学校で使っている教材や授業のノートにかなり限定されている(学校重視)。なかでも教科書からの出題がもっとも多く、入試問題は特別に意識されていない(基本重視)。また、ノートからの出題も多いことによって生徒は授業をしっかり聞くことが必要になっている(授業重視)。一方、市販のテストを参考にしているのは3割に対して、全くオリジナルな問題を考える教師は6割いる(オリジナル志向)。定期試験の問題作成にあたっては、このような全体的傾向があるが、担当教科間で差がある。定期試験の内容やスタイルは、授業の進め方・形態や、どんな能力を評価するのか、評定と観点別評価の関係をどう捉えるのかといった、評価についての考え方と、おそらく不可分になっている。(図3-7、図3-8)

第4章 教育観と教職生活

第1節 中学校教員の教育観

2つの極端なことがらをペアにして設定し、授業や生徒指導の場面で「あえていえば重視していると思うほう」を、強制的に選択させるという、やや強引な手法によって、教員の日常的な指導の背後にある教育観を浮かび上がらせようと試みた。

- ・レベルの高い高校を目指させるよりも適性や個性にあった高校へと入学させること、集団からはみ出るような個性的な生徒を育てるよりも協調性を養うこと、若者の風俗・流行・文化を尊重するよりは中学生にふさわしい服装、態度、行動をとらせること、強制的な学習よりも自発的に学習する意欲や習慣を身につけさせることなどが重視されている。
- ・中学校教員の教育観を、子ども中心主義に基づく「可能性開花支援」派か、それとも一

人前の大さになるために必要な「社会化・訓練」を重視するかという軸と、学校教育の中心を「心の教育」(パーソナリティや生活指導)に置くのか、それとも「授業」に置くのかという軸によって、4類型(パーソナリティ訓練型、パーソナリティ発達支援型、知的発達支援型、知的訓練型)に分類することができる。全体としてもっと多いのが、パーソナリティ発達支援型で、全体の43.0%を占めている。これにパーソナリティ訓練型(25.6%)が次ぐ。知的発達支援型(18.5%)、知的訓練型(12.9%)はこれらと比べると少数派である。(図4-1、図4-10、表4-1)

第2節 生活時間

1. 出勤・退勤時刻と部活動指導

出勤時刻でもっと多いのが、始業時刻の30分前頃で36.8%、これに15分前頃が35.2%で次ぎ、両者で7割を超える。退勤時刻は、午後7時頃(22.0%)と6時半頃(20.7%)が多く、この時間帯をピークとした分布を描く。約7割が6時から7時半頃の間に退勤している。

平均的な週における部活動指導日数をみると、最頻値は6日の22.6%、これに5日(16.3%)、0日(14.7%)、3日(10.7%)が続く。週に5日以上指導している教員を合計すると5割弱(48.5%)に達する。(図4-11、図4-12、表4-4)

2. 家庭での生活時間

睡眠時間の平均値は、6時間25分である。6時間くらいが42.0%、7時間くらいが35.5%であり、約8割弱がこの2つに集中している。

テレビを見たり音楽を聴く時間は1時間強、家庭の仕事(食事の支度などの家事や育児)をする時間も同じく約1時間、学校の仕事(教材研究、事務処理、生徒への連絡など)に費やす時間は50分、新聞を読んだり読書する時間は30分強である。

女性教員は、家庭の仕事をする時間が男性より顕著に長く、その分、睡眠時間、テレビや音楽、新聞や読書の時間が少しづつ短くなっている。(図4-14、図4-15)

3. 教職生活の将来展望

「管理職になりたい」は16.5%、「管理職にはならず働きたい」が50.1%、「将来は教師を辞めたい」13.3%、「今真剣に教師を辞めたい」2.7%である。また「特に考えたことはない」者も16.0%いる。(図4-18)